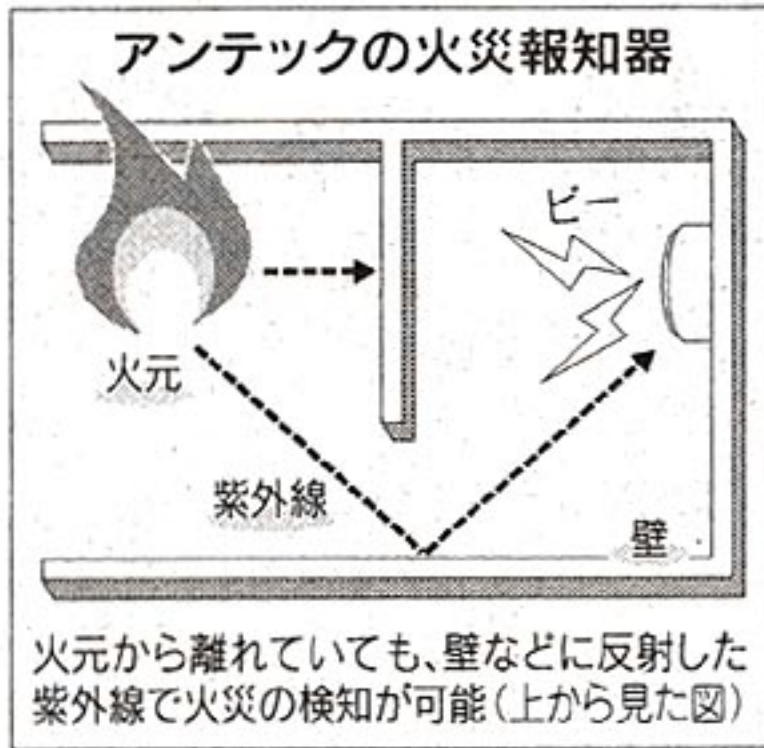


紫外線センサー開発へ

火災報知機用 熱感知並み安価に

電子機器製造販売のアンテック（岡山県瀬戸内市、末石建二社長）は、独立行政法人の物質・材料研究機構（茨城県つくば市）と紫外線センサーの共同開発を開始した。アンテックが製造している紫外線検出タイプの火災報知機を現在の三万円から半値程度に下げ、競合する煙や熱を感知する報知機の価格帯に近づける。



新製品には物質・材料研究機構の小出康夫主席研究員が開発した、ダイヤモンド半導体を使った新しい紫外線検出素子を利用する。この素子は従来のUV管式の素子と比べ安価で小型、電力もほとんど消費しない。アンテックはこれに紫外線検出で太陽光の影響を受け

ない自社の処理技術を組み合わせる。アンテックが販売している火災報知機は太陽光には反応せず、炎に含まれる紫外線だけに反応する。紫外線は反射して進むため、火元から遠くても火災を検知できる。ただ価格は店頭で三万円前後（オープン価格）で、現在主流の煙や熱を感知するタイプの五千〜一万五千元程度と比べ割高感があった。

新たに開発する火災報知機は従来の製品と比べやや性能は下がるものの、値段は半分程度で、電圧も三百七十ボルト必要としたのが三ボルトで足りる。大きさも現在の直径六十八ミリ、高さ二十五ミリの円柱形から小型化できる。

末石社長は「紫外線検知タイプの火災報知機の認知度を上げ、現在主流の煙・熱検知型に対抗したい」としている。

平成17年10月4日
日経新聞